

第 10 回 コンフリクトの人文学セミナー

共生社会を生きるアフリカの言語と社会

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授

梶 茂樹

2008 年 3 月 27 日 (木) 15:30 - 17:30 大阪大学豊中キャンパス 待兼山会館 2 階会議室

工藤真由美 (司会：大阪大学文学研究科教授)

それでは、今日は言語としては第二回目のセミナーになるのですが、「コンフリクトの人文学」のセミナーを始めます。アフリカのフィールドワークから帰ってきたばかりという梶先生にお忙しいところ来ていただきまして、どうもありがとうございます。今回の調査ではピグミーのフィールドワークをしたっていう、今日の話よりももっと面白そうな話題だったんですけど (会場：{笑い})、今日はしないとおっしゃっていますので、そのへんはまた質問の時に聞いてください。

簡単に梶先生をご紹介いたしますと、1976 年よりコンゴ、タンザニア、セネガル、ルワンダなど、主としてアフリカの言語調査に従事しておられます。現在京都大学の大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の教授で、前は東京外大の AA 研 (アジア・アフリカ言語文化研究所) におられました。みなさんが一番読みやすい本としては『アフリカをフィールドワークする』っていうのが大修館から出ておりますが、その他英文を含めて非常にたくさんの論文がおありです。今日のお話の内容は、私は既に、とあるところで伺っているのですが、消滅の危機に瀕している言語を守る、あるいは復興させるというのが言語学者の使命なのだという考えが流布しているのですが、いわばそれに対するアンチテーゼということになるのではないかと思います。では、どうぞよろしくお願いいたします。

1. はじめに—世界の言語の中のアフリカ諸語—

それでは話を始めさせていただきます。私の主にやっていることは、一般的な言い方をすると、記述言語学ということになると思うのですが、今日の話はちょっとそれとはずれるというか、私もどういう話をしていいかわからなかったんで、「コンフリクト」っていうのにとらわれすぎたのかなっていうふうに思いますけれども、一応タイトルは『共生を生きるアフリカの言語と社会』っていうふうにしてみました。こういう社会言語学的な話は、私はほとんどしたことがないので、どういう話になるか、私にもよくわからないのですが、去年日本学術会議っていうところで「何か話をしろ」というので 20 分くらい雑談っぽい話をしたんですけど、今日はもう少し真面目にやろうとは思っていますけど、つつい社会言語学の話は私にとっては雑談っぽいというか、そういう話になってしまうので、もしそういうことになったらお許しください。

それで、今日の話の筋として、どういうことを私がお話したいかといいますと、なにか論文を書くときに、どんな論文でもいいと思うのですが、最初に閃きというか、「こんなことじゃないだろうか」と思うものがちょっとあると思うんですよね。そういうものをヒントにして、いろんなデータを集めて論文にしていく、というふうに思うのですが、そういう最初の認識というか閃きというのは、たとえば言語というものについて私が何気なく思っているようなことが、どうもたとえばアメリカ人とかヨーロッパ人が思っているのとちょっと違っているみたいだ、というのがきっかけになって、こういう話をしてみようと思ったわけです。

私が言いたいのは、世界の言語というのは非常に小さな言語が多いということなんです。私が調査しているのは、話者数が、せいぜい数万人から多くて数十万です。でも、ある時、「話し手は十万人ぐらいの言語なんです」と、ある日本人の言語学者に言ったら、「それはものすごく大きい言語だ」と言われたことがあります。その人は数百人の話し手の言語を調べているわけですね。しかしもっと大きな、たとえば英語とかフランス語とかそういう言語、日本語もそうだと思いますけど、研究している人から見たら、十万人しか話し手がいなくて、ものすごく小さい言語だと逆に思う。ですから、自分がいつも扱っているものとの対比でみんなも考えてしまうようなところがあるので、そのへんの認識の違いみたいなのがどこかにあるのかな、というのが、前からしていたわけです。

それで、私の調査対象はアフリカの言語ですけれども、アフリカの言語状況の話をするために、国際 SIL (Summer Institute of Linguistics) のデータを持ってきましたので、それを見ていただきたいと思います。表 1 はインターネット (<http://www.ethnologue.com/web.asp>) に載っているのみなさんも見た方が多いと思いますけれども、国際 SIL という、これはキリスト教系の団体ですけれども、世界中の民族とか言語を調査していて、ウィクリフという姉妹団体と協力して、聖書を世界の言語に翻訳するというのをやっています。そして、そのために世界中の言語を調査しているわけですね。それで、世界中からいろんなデータが集ってきて、それをまとめてデータベースにして、印刷本も市販していますけれども、インターネット版でも見ることができます。これはただです。表 1 は、元々は英語で、これは私が日本語に訳したものです。ただ、この国際 SIL の人たちは、あんまり細かいことはよく知らない人が多いと思います。どうしてそれがわかるかという、自分がよく知っている地域のことについて見てみると、誤りがいくつもあるんですね。私も、かつて「これはどうなっているのですか？」と国際 SIL の人から聞かれたことがあります。いずれにせよ、そういうものをデータにして彼らは集計しているわけです。ただ自分が知っているところは、そういうふうには違っているのではないかと言うことができますけれど、知らないところはやっぱり知らないわけですから、ある程度頼りにせざるを得ないわけです。

表 1 世界の言語の分布 (言語の起源地に基づく)

地域	言語数(死語は除く)		話者数		平均値	中央値
	数	パーセント	数	パーセント		
アフリカ	2,092	30.3	675,887,158	11.8	323,082	25,391
アメリカ	1,002	14.5	47,559,381	0.8	47,464	2,000
アジア	2,269	32.8	3,489,897,147	61.0	1,538,077	10,171
ヨーロッパ	239	3.5	1,504,393,183	26.3	6,294,532	220,000
太平洋	1,310	19.0	6,124,341	0.1	4,675	800
合計	6,912	100.0	5,723,861,210	100.0	828,105	7,000

表 1 では、地域ごとに集計されていて、アフリカの言語が 2,092、アメリカが 1,002 というふうになって、全世界合計で 6,912 の言語があります。これを見てもわかると思うのですが、アフリカが 2,092、そしてヨーロッパが 239 あるというのですが、239 も言語が言えますか？みなさん、ヨーロッパにある言語... (会場：{笑い}) 言えないでしょ？だからやっぱりちょっと多めなんですね。アフリカについては後でいくつかお話ししますが、言語と方言の区別がなかなか難しい。一般的に言って、この国際 SIL の人たちは言語の数を多めに言う傾向があります。それはまあ、しょうがないと思うのです。私なんか、アフリカ行って調査するのですが、なるべく小さな言語を調査したいんです。小さな言語のほうが、言語構造が面白い。大きな言語というのは、いろんな人が使うので、どうしても角が取れていたりして面白くない

いのです。私なんかを見ると、小さな言語ほど、いろいろな意味でおもしろい。で、ついつい小さな言語を調査してしまうので、それが方言なのか言語なのかをあんまり考えずに実体化してしまうみたいなどころがあつて、数が大きくなってしまふのですね。

それで、話者数のパーセンテージもありますけれども、その右のほうに「平均値」と「中央値」っていうのがありますね。「平均値」というのは話し手の数を、アフリカならアフリカの、全体の人間を言語数で割った数です。323,082 となっていますけど、その右の「中央値」というのは、ちょっと違います。どういうことかと言うと、平均値っていうのは単純に、人間の数を言語の数で割ったもので、たとえば 1000 万ぐらいの話し手のある言語、ヨルバ語とかそういう、ハウサ語はもっと何千万人とあります、そういうふうな言語があると、数百人しか話さない言語があつたとしても、平均値はぐっと上がってきます。中央値というのはそういう歪を直すために、10 人しか話し手がない言語がひとつあります、15 人が話す言語が 20 あります、というふうに順番に下から並べていって、上からと下からと一つずつ潰していくわけですね。そしてちょうど出会ったところがその中央値ということで、この方が大体実態に合っているというふうに言われています。それで、一言語の話し手の中央値がアフリカでは 25,391 人です。このぐらいの数になってしまうわけです。アメリカだと 2,000 人。平均値は 47,464 ですが、中央値は、一つの言語あたりの話し手は 2,000 人となっているわけですね。アジアが 10,000 人ぐらいで、ヨーロッパが 220,000 人。ヨーロッパは「起源地」というふうになっています。ヨーロッパに入っている言語っていうのは、人間もそうですけど、英語話している人間、あるいはスペイン語話している人間っていうのはヨーロッパに入っていますので、アメリカに住んで、英語話したりスペイン語話したりしている人はヨーロッパの数の中に入ってきているわけですね。で、話し手の数が 15 億人というふうに多くなっているわけです。太平洋地域っていうのは一言語あたりの話し手の中央値で見れば 800 人ですよ。全世界で見ても 7,000 人ぐらいです。こういうのがどうも世界の言語の、標準的になっていくか、普通のあり方なわけです。

その次の表 2 を見ていただくと、これも同じ国際 SIL によるデータベースから持ってきたものですが、話し手の数ごとの言語数と話し手の数を表しています。

表 2 第一言語話者数の分布

話者数の範囲	言語数(死語は除く)			話者数		
	数	パーセント	合計	数	パーセント	合計
100,000,000 から 999,999,999	8	0.1	0.1%	2,301,423,372	40.20753	40.20753%
10,000,000 から 99,999,999	75	1.1	1.2%	2,246,597,929	39.24969	79.45723%
1,000,000 から 9,999,999	264	3.8	5.0%	825,681,046	14.42525	93.88247%
100,000 から 999,999	892	12.9	17.9%	283,651,418	4.95560	98.83807%
10,000 から 99,999	1,779	25.7	43.7%	58,442,338	1.02103	99.85910%
1,000 から 9,999	1,967	28.5	72.1%	7,594,224	0.13268	99.99177%
100 から 999	1,071	15.5	87.6%	457,022	0.00798	99.99976%
10 から 99	344	5.0	92.6%	13,163	0.00023	99.99999%
1 から 9	204	3.0	95.5%	698	0.00001	100.00000%
不明	308	4.5	100.0%			
合計	6,912	100.0		5,723,861,210	100.00000	

一番上の欄を見ると、一億人から十億人未満の話し手のいる言語は8つあり、全世界6,912言語の0.1パーセント、そして話し手数が23億で全世界人口の40パーセントとなっている。次に、一千万から一億未満の話し手の言語が75あって、言語のパーセントで1.1。そして1.1と上の0.1を足して合計で1.2パーセントになる。1.1パーセントの話し手の数は22億4600万。パーセントで39パーセント。上と足して79パーセント。三段目が百万から一千万未満ですね。264言語があって、3.8パーセントであると。上の二つと足して5パーセントになる。話し手の数は合計すると94パーセントぐらいになってくる。後でまたこの点については触れたいのですが、話し手の数が百万人以上の言語の数っていうのは世界中で5パーセントぐらいしかないのに、話し手の数から言えば94パーセントぐらいになるという、非常にアンバランスというのか、大きな言語は非常に大きいし、小さな言語は非常に小さいということになってくる。言語話者の偏在性というのが示されているわけですが、特にこの話し手が百万人以下の言語が世界の95パーセントを占めるという点は注目していいと思います。このことは、後で触れる危機言語とは何かという問題に関わってくる問題なんですね。一般的に言って、世界の言語では、話し手の数っていうのは非常に少ないんですね。

2. 部族語の世界

今、言語の数とか人間の数とか言いましたが、それはいわゆる部族語の世界ということなのでありますが、私の調査しているのはこの部族語の世界なんですけど、今日はちょっとあんまりその内容には立ち入ってお話できないと思いますが、一体アフリカの言語ってどんなのだというのは、みなさん興味持つ人もいるかと思うので、ちょっとだけデータを持って来ました。

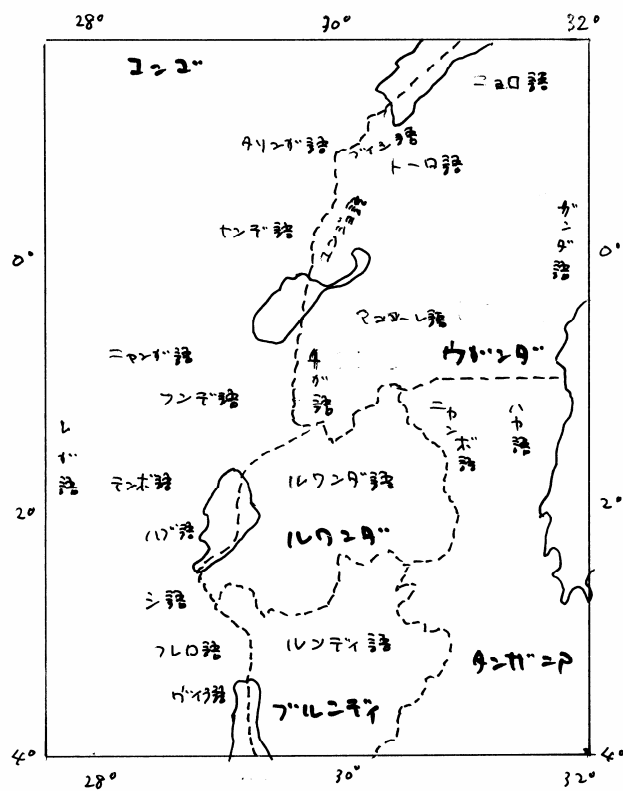


図1 コンゴ東部～ウガンダ・タンザニアの言語

図1で示した地域は、私が昔からよく調査している地域の一部です。左の方はコンゴですね。昔はザイルと呼ばれていましたけども、コンゴ東部です。それからウガンダが右の上の方であって、その下にルワンダっていう国があってブル

ンディってのがあって、その東側がタンザニアという国。そのちょっと右の方に出ていますけど、これはビクトリア湖って湖です。この地域は湖がたくさんあって、上のほうからアルバート湖、エドワード湖、キブ湖、一番下にちらっと見えているのがタンガニカ湖です。こういうふうに湖が連なっている地域なんですね。1970年代は、このコンゴ側で私は調査していた。しかし91年に暴動が起こり外務省も渡航自粛勧告を出したりして行けなくなったので、近辺をうろうろしていましたが、最近ではウガンダで調査をしています。で、いまだにそのコンゴは行きづらいですね。で、ウガンダ西部で調査して、「あ、あの山の向こうが、昔私が調査していたコンゴなんだ」って郷愁に駆られながらやっているんです。ここにルーウェンゾリという有名な山があります。「月の山」と呼ばれるんですけど、これはギリシャ人も実は意識していた山、ナイルの源流ということで、ギリシャ時代から知られていた山なんですけども、その山を望みながら調査しています。

言語はたくさんあるんですけど、いくつかだけ例を持ってきました。ナンデ語っていうのが左上のあたりにありますけど、この言語はコンゴではナンデって呼ばれていますけど、ウガンダへ行くとコンジョと呼ばれる。ナンデ族、コンジョ族、言語で言うとナンデ語、コンジョ語、これ実は同じ言語なんです。その言語を昔調査していたんですけど、例えば「頭」というのは[omútwé]と言うんです。アクセント記号ですが、アキュートアクセントは高いトーンですね、何も書いてないのは低い。そして[omútwé wave]は「私の頭」ということです。その南側にフンデ語がありますけど、これもよく似ていて、[ámü:twé]というのが「頭」で、「私の頭」は[ámútwé wa:ni]と言います。そのもうちょっと南にテンボ語というのがありますけど、これはちょっと名詞のクラスが違うので[mu]というのは出てこずに[é]を付けて[étswé]と言う。[tswé]のところと同じ語幹なわけですね、で[étswé lyají]と言うと「私の頭」です。ウガンダの方へ行くと、トーロ語というのがありますけど、それを見ていただくと[omútwé]という「頭」で、「私の頭」は[omutwe gwáŋge]と言います。その同じくウガンダですけど、南にアンコーレ語というのがあります。この言語でも[omútwé]というのが「頭」のことで、「私の頭」は[omutwé gwanje]と言う。トーンが少し違うのと子音が違うということがありますがけれども、ほぼ同じです。その南側、タンザニア領に入りますがハヤ語というのがある、この言語ではですね、やっぱり「頭」は[omútwé]と言うんです。「私の頭」は[omutwé: gwange]と言います。特にこのウガンダのトーロ語、アンコーレ語、そしてタンザニアのハヤ語というのは非常によく似ているわけですね。

今日はデータはありませんが、トーロ語の北側にニョロ語というのが話されています。このニョロとトーロ、アンコーレ、そのちょっと左のチガ、そのタンザニアに入ってハヤ、ニャンボ、こういう人たちの言語は非常によく似ている。ルワンダ語もよく似ています。しかしながら、これは、どうしてアフリカで言語の数が増えるかっていうことの一つの例なんですけれども、ニョロ族、トーロ族、アンコーレ族、そしてルワンダ、ブルンディはもちろんですけど、王国をずっと形成してきたんですよ。ルワンダ、ブルンディはそれぞれが一つの国になっていますけど、ニョロとかトーロとかアンコーレは、ウガンダの国の内部に入っていて、現在王国はあるんですけど、一つの国の中に入っていてあまり目立ちませんが、同じようなタイプの国なんですね。しかし言語は非常によく似ている。このルワンダ語とブルンディ語もよく似ています。どのくらい似ているかという、どんな感じですかね...京都弁と神戸弁ぐらいの違いだと思いますけど、彼ら自身も言語が似ていることはよく知ってるんですよ。お互い同士よく知ってはいるのだけれども、しかし、自分たちが誰かの言語の方言を話しているというふうには思いたくない。ずーっと別の国を形成してきたし、国ができて以来、国境線も全く変わらないんです。何百年かまったく変動なしで、それぞれが独自性を保っている。しかし、ルワンダとブルンディは、国の構成から言語からあらゆるものが双子なんですね。それぞれにツチ族とフツ族がいる。ツチ族は牧畜民で背の高い人たち、フツ族は背が低く農耕民です。彼らの間には、まさにコンフリクトがあって、その争いは私たちもよく知るようになりました。ブルンディもまったく同じ、そしてアンコーレも実はまったく同じ構造なんです。トーロ、ニョロはちょっと違いますけど、それでもまあ似たような...。言語も社会構成も非常によく似ているんだけど、違った王国を構成してきているので、ついつい自分たちの独自性を主張するようになった。純粋に言語学的な観点から見たら、こんなのは方言

とみて差し支えないと思いますけれども、なかなかそうはならないですね。それも一つの理由で、言語の数が増えていく。

それと、このあたりは国境地帯ですから、コンゴへ行くとみんなフランス語をしゃべるし、ウガンダはみんな英語をしゃべりますので、そういうことも一つの理由で、ナンデとコンジョという、これも一つの民族なのにどういうわけか名前が別ですね。その上側にブイシ語というのとタリンガ語というの、これも実はまったく同じ言語なんですけど、国境をはさんで名前が違うんですね。こういうのはいくつもあります。図1には書きませんでしたけど、ブイシ語の北にアンバ語、アンバ族っていうのがあって、これがコンゴ側に行くとフムでしたか、そういう名前が変わる。これもまったく同じなんですけどそういうふうにな名前が違う。

3. 系統分類

私が現地でやっていることは、そうやって、よく似ているものもあるし、ブイシ語やアンバ語のようにかなり違うものもあるんですけど、そういうちょっとずつ違う言語を一つ一つ記述して行って、それから比較言語学的な研究をやっているわけですけど、そのことは今日は省かせていただきます。

それで、アフリカの言語を見ているとおもしろいことがたくさんあります。次の図2を見ていただくと、ここにアフリカの言語の系統分類ということを地図上で示したものが載っています。

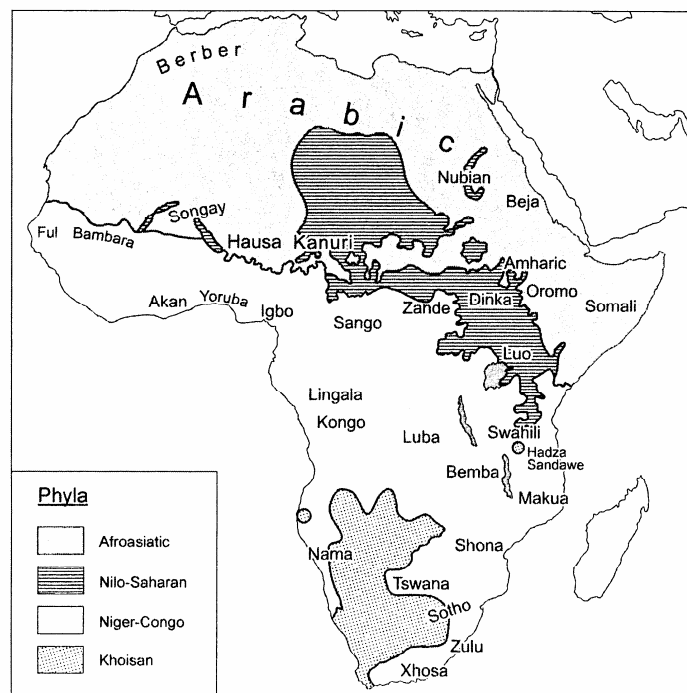


図2 アフリカ諸語の系統分類

これはアメリカの Joseph Greenberg という人の研究をベースにして新たに書いたアフリカの言語の系統分類です。大きく4つの語族があるということです。上の方はアフロ・アジア語族という、昔はセム・ハム語族と呼ばれていた系統の言語ですけども、アラビア語なんかが含まれています。それから真ん中の白いところはコンゴ・コルドファン語族、最近ではニジェール・コンゴ語族と呼ばれたりしますが、西のセネガルから東のケニア、それから南アフリカまで、アフリカ

リカのかかなりの部分を占めています。マダガスカルは違います。これは白く見えていますけれども、オーストロネシア語族ですから系統が別です。ニジェール・コンゴ語族の北側に、ナイル・サハラ語族というのがあって、これがちょっと虫食い状態ですけども、広く分布しています。それから一番下にコイ・サン語族というのがあって、これはかなり固まって南部アフリカに分布している。この4つが主要なものです。あとはアフリカーンスみたいな言語とかピジン・イングリッシュみたいなヨーロッパ起源の言語もありますけれども、その導入は比較的最近なんで、一応それは除けておきます。

前にお配りした用紙にちょっと書きましたけど、このアフリカには4つしか語族がないというのは私にとっては驚異的なことに映るんです。どうしてかという、例えばアメリカインディアン諸語について書いてあるものを読んでみると、北アメリカだけで語族は50もあると言うんです。それよりもアフリカは広いのに、どうして4つしかないのだろうか。これは前から疑問なんですけど、よくわかりません。おそらく、アフリカが今表している状態というのは、比較的新しいのではないかと私は思うんです。アメリカはもっと古い状態をまだ表しているのではないかと思いますけれども、正確なことはわかりません。比較言語学で遡れる時間というのはせいぜい3,000年とか4,000年、5,000年ぐらいです。インド・ヨーロッパ系の言語でも、今から5,000年以上前のことはわからないのです。アフリカなんかはせいぜい2,000年前ぐらいまでのことしかわからないわけです。ですから、人類の起源というんですかね、何百万年という歴史から見れば、ほんの最近のことしかわからない。それ以前はどうなっていたかわからない。アメリカは、人類が行き出してせいぜい五万年とか六万年、そういう話ですから、新しいことは新しいんですけど、あれだけ語族がたくさんあるということは、おそらく5,000年より以前の状態をまだ保っているのではないかと思うんですね。この辺のことはちょっといい加減な話なんで、そう思うというだけの話です。恐らく、何万年という古い時代のことは比較言語学ではもう再構成できないので、途切れてしまう。そういうわけでまとめることができない状態が続いていると私は思います。アフリカの場合は恐らく、比較的新しい状態だと思うんですね。もう少し古い時代になると、もう少しごちゃごちゃしていて、こんなに均一的な状態には恐らくなっていなかったでしょう。

しかし図2の分布図を見ていると、ある程度歴史というのはわかります。たとえばナイル・サハラ系の言語は、その分布がかなり虫食い状態ですね。特に西の方にソンガイ語というのがありますけど、こういうのが飛び地的に分布しているんですね。東の方に行っても、北からはアフロ・アジアティックの言語が、南からはニジェール・コンゴ系の言語がずっと伸びてきて、分布はかなり分断されているわけですね。コイ・サン系の言語も大体南部に固まっていますけど、国で言えばタンザニアにサンダウェとハツァというのがある、これが離れて分布しているわけですね。こういうのを見ると、恐らくコイ・サン系の言語も、かつては南部アフリカから中部アフリカの一带にかけて分布していて、これがニジェール・コンゴ系の特にバンツールと呼ばれる系統の言語がカメルーンあたりから大陸の東南に伸びてきて、分布を分断してしまった。ですから、このバンツール系の言語は比較的広い分布をしている割にはよく似ている。さっきウガンダの例でちょっとお見せしましたけど非常によく似ているんですね。よく似ている言語が広く分布しているということは、その分布が比較的最近であるということを示しているわけです。

4. 多言語使用—部族語・地域共通語・公用語—

私の個人的な興味は部族語なんですけど、しかし、アフリカはいろんな言語が話されています。部族語だけじゃないんですね、話されているのは。言語が違うと隣の言語もできるという人も、もちろんたくさんいるわけですけども、まわりにたくさんありますから全部は話せない。ということで共通語というのができてくる。これはミSSIONナリーの力が係っている場合もありますが、多くは自然発生的にできてくるわけです。そういう共通語が実はアフリカ中を覆っています。一例ですけど、図3のコンゴの4大地域共通語の分布を見ていただきたいと思います。

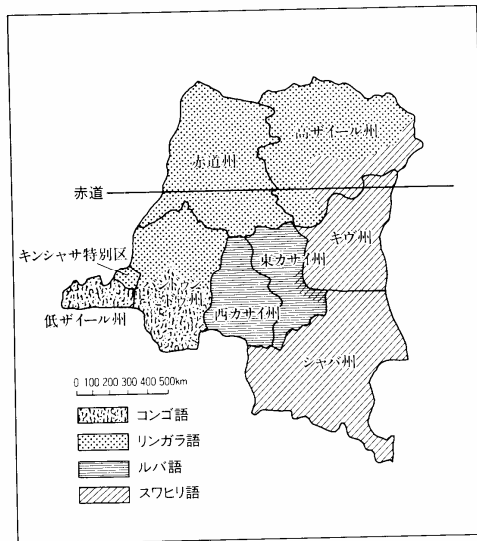


図3 コンゴの4大地域共通語

このコンゴには250ぐらいの言語(部族語)が話されていると言われてはいますが、大きな地域共通語が4つあります。東の方はスワヒリ語が話されている。このスワヒリ語というのはケニアやタンザニアの海岸地帯で、アラブ系の人たちとバンツウ系の人たちの交渉の中で生じてきた言語ですけれども、それがアラブ系の人々の商業活動その他で内陸部までずっと及んでいきました。その後、キリスト教の布教の影響や学校教育で使ったってということもありますけれども、ケニア、タンザニア、それからそのコンゴの東の方まで一帯に話されるようになっていきました。コンゴも東の方ですね、3分の1ぐらいの地域はスワヒリ語が共通語です。そして北の方はリンガラ語という言語が話されている。中部あたりにルバ語、そして西の方はコング語ですね。コング族というのはアンゴラあたりにも住んでいるし、コンゴ・ブラザビルにも住んでいて、国境によって分断されているわけですけど、非常に大きな民族ですね。このコング族はザイールにもたくさんいて、大きな共通語になっています。

そして、この4つの言語が、コンゴでは「国語」と呼ばれています。国内に国語がいくつもあるというのは、アフリカではよくあることです。「国語」という用語もややこしく、「国語」と訳していいのかどうかさえ私はよくわかりませんが、英語では *national language*、フランス語では *langue nationale* と言われます。ただ、その定義が人によって国によって違います。*national language* を「民族語」というふうに訳す場合もあるし、「国民語」と訳す場合もあるし、また「国家語」と言う人もいますし、単に「国語」という人もいます。けれども、いずれにしても *national language* というのは国全体に関わる言語という意味です。しかし、「国語」という用語がややこしいのもう一つ、ヨーロッパとの対比で *national language* と呼ばれることがあるので、その場合はどんな小さな言語でもその国に話されている限り *national language* すなわち、われわれの国の言語ということになります。大きな言語を *national language* という場合、それが一つに統一されればいいわけですけど、なかなかそうはいかず、3つ4つ、あるいは5つ6つ *national language* が一つの国にあるというのがアフリカのよくあるパターンです。西アフリカのセネガルみたいな小さな国でさえ、*langue nationale* は6つあります。コンゴはかなり大きい国ですけど、*langue nationale* は4つです。

部族語と共通語に加えて、もう一つ言語の層として、公用語というのがあります。英語では *official language* と言われます。*official* というのは、たとえば市役所なんかに行った時に、あるいは大学でも教務課に行って公的書類をもらうときに、書かれている言語のことですね。あるいは国会で議論する場合に、その *official language* でみんな話すということになる。それは大体ヨーロッパの言語を引きずっているもので、英語圏だったら英語だし、フランス語圏だったらフランス

語、ポルトガル語圏だったらポルトガル語になっています。このコンゴの場合はフランス語です。

ですので、言語の層が最低限3つ、場合によってはもっと狭い地域で話されている共通語もあるので、4つぐらい層がある場合もちろんあるわけですが、いくつか層に別れている。そういう状態を、私は用語をつけてみたのですが、一つの中にもたくさん言語（部族語）があるという状態を、「水平的多言語使用」と名前をつけました。それに対して、言語が層をなして用いられていて、人は状況に応じていろんな言語を使い分けるときに、それを「垂直的多言語使用」というふうと呼んでみることにしました。

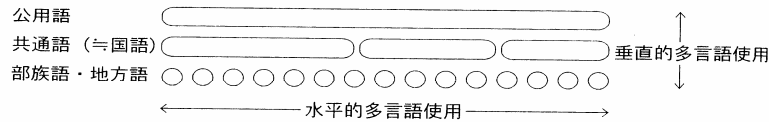


図4 アフリカにおける多言語使用の概念図

その公用語ってのはだいたいヨーロッパの旧宗主国の言語を引きずっているわけですが、教育に関しては、みんなその現地語で教育しようというわけです。しかし多くの国で、小学校一年から英語やフランス語で授業をしている、というのがいまだにアフリカの状況なんです。じゃどうしてそれが直らないのかという問題がある。みんな小学校一年から英語で授業しても理解できない。フランス語で最初から授業やってもなかなか理解できないのですが、なかなかそれが直らない。それはどうしてかっていうのを、われわれは考えないといけないと思うんですけど、教科書がないとか、もちろん理由はありますけど、私が見るところ一番大きな理由は、その言語政策をやる人たちのメンタリティの問題だと思うのです。彼らは英語圏だったら英語で、フランス語圏だったらフランス語で、出世街道を歩んできたわけです。それで自らの現在の位置を保っているわけですが、そういう人たちは、例えば英語をやめて何とか語でやりましようと言っても、結局それは自分のことじゃないと思ってしまうんですね。なので、いくら言語政策を立てても、それを実施に移す段階になるとかなりいい加減になってしまう。もっと言えば、彼らは英語とかフランス語によって自らの位置を保っているわけで、その英語とかフランス語の地位が下がるのを嫌がるわけです。それでついつい現地語を推進しようと言いつなおざりになっています。それで、いまだに英語やフランス語がアフリカで幅を利かしているわけです。

けれども、じゃ英語やフランス語が全くダメかという、私はそうは思いません。非難する人はたくさんいますけれど、しかしある一定の役割を果たしていることは認めないといけない。特にタンザニアみたいな国ですけども、部族語は110とか120あると言われてはいますが、共通語としてスワヒリ語が非常に普及しました。小学校はスワヒリ語で授業をしている。タンザニアはあまり大きな部族とか民族がないので、スワヒリ語が共通語として本当に普及して、これはそういう意味では非常に成功しているわけですが、中学校からは英語で授業をやっています。その英語の役割ということですけど、タンザニアのある言語学者と話していて私もそうだったんですけど、彼が言うには「英語が部族語を救っている」と言うわけです。私もそういうふうに思います。もしこれが中学校も全部スワヒリ語で授業ということになると、おそらく民族語とか部族語っていうのは非常に危機に瀕してくる可能性がある。現在、村に行くとみんな自分たちの言語、部族語を話しているわけですが、町に来ると必ずスワヒリ語になってしまいます。町で生まれる子供もたくさん出てくるようになる。これはアフリカの中でも例外的な国だと私はタンザニアを見て思いますけれども、スワヒリ語が共通語として非常に普及しているわけですね。なので、学校教育を全部スワヒリ語にすると、部族語が危うくなる可能性がある。それを非常に逆説というか、英語が救っているという側面もある。なので、なかなか「これがいい」「これはダメ」と一概には言えないわけですね。

しかし、ヨーロッパ語でおもしろいと思うのは、たとえばルワンダとかブルンディとかね、あるいはモーリタニアもそ

うですけど、国内にほとんど言語が一つしかないような国があります。ルワンダはもうルワンダ語だけ、ブルンディもブルンディ語だけ、モーリタニアはハサーニア語っていうアラビア語の方言ですけども、もうほとんどの国民がそれを話します。にも拘らず、公用語はフランス語であるというのが現在のアフリカの状況なんですね。

5. アフリカの部族共生の原理

部族語の問題について、もう少しお話ししたいと思います。このことが今日の話のメインみたいなことになってくるんですけど、「アフリカの部族共生の原理」というタイトルにしておきましたけども、危機言語との絡みなんです。危機言語ということで話してもよかったですけど、一応、「部族的共生」ということでお話しします。「危機言語」ということが、この20年ぐらいの間に盛んに言われるようになってきました。そして、それとアフリカとの関係ということで私の考えてきたことがあるので、それをお話ししたいと思います。

5.1 危機言語とは

20年ぐらい前ですね、特に1990年代ぐらいから、世界の言語はそのうちになくなるのではないかということ、つまり「危機言語」ということが盛んに言われるようになってきました。これは私は一つは20世紀の末ということで終末論と関係してるのかなと思いますけど、特にそういうことを盛んに言った人が、アメリカのマイケル・クラウスという方です。この方は日本に2回ぐらい来ました。当時、京大にいた宮岡伯人先生が危機言語の特定領域研究をされていて、シンポジウムに参加するため2回ぐらい来られたというわけです。また、いくつも論文を書かれています。以下に3つ重要なものをあげておきます。

"The World's Languages in Crisis", *Language* 68(1), pp.4-10, 1992.

"The Scope of the Endangerment Crisis and Recent Response to it", in K.Matsumura (ed.)

Studies in Endangered Languages, Hituzi Syobo, pp.101-113, 1998.

"Mass Language Extinction and Documentation: The Race Time", *Lectures on Endangered Languages: 2 - From Kyoto Conference 2000* -, pp.19-39, 2001.

もちろん、この人以外にもいろいろな人が「危機言語」ということを随分煽って、日本国内でもそれに呼応する形でいろいろなことがなされてきました。たとえば、日本言語学会の中にも「危機言語小委員会」っていうのができて、私も最初からずっとメンバーになっていたんですけど、あとで辞めさせてもらいました。この人たちが何を言っているかっていうと、21世紀中に「下手をすると」とか、「最悪のシナリオでは」という修飾語がいつもつきましますけども、世界の言語の90パーセントから95パーセントがなくなる可能性がある。なくなるとは言っていない。なくなる「かもしれない」という言い方をしているわけですけども、まあしかし「下手をすると」という言い方をいつも言っていますので、「なくなるんだ」ということを言ってるわけです。

そういう意見が非常に強くて、今でも、そういうこと言う人がたくさんいて、大部分の人はそういうふうにいるのではないかと思いますけども、しかしちょっとおかしいのではないかという人も何人かいます。私もそうなんですけれど、最初にこれを言い出した人はドイツのマティアス・ブレンツィンガーという人です。この人はケルン大学のアフリカ研究所の先生ですけど、この人も何回か日本に来ました。私も東京外大のAA研にいる時に一年間客員教授で呼んだことがあります。この人がですね、これは京大の宮岡先生が主催した国際会議だったのでですけど、「周縁化とグローバル化による言語の危機」(宮岡伯人・崎山理編訳(2002)、『消滅の危機に瀕した世界の言語—ことばと文化の多様性を守るために』、明石書店、pp.83-117)という論文を発表しました。この同じ時にマイケル・クラウスも実は来ていて、「言語

の大量消滅と記録」(上掲書 pp.83-117) ということでは発表することになっていたのですが、その発表の後にこのマティアス・ブレンツィンガーが発表することになっていました。私はそのコメントを頼まれていたので、よくこの論文を読んできました。マティアス・ブレンツィンガーはあまり大袈裟には言いませんけど、このクラウドを批判しているんです。ただマイケル・クラウドが1日遅れて来たため、マティアス・ブレンツィンガーの方が先に発表することになってしまい、本人の前での批判ということにはなりません。どういう批判かという、危機言語には3つのレベルがあると言うんです。マイケル・クラウドは、そのうち「世界的レベル」と「国内レベル」を混同していると言うんですね。「世界的レベル」というのはグローバル化のことで、たとえば全世界的に英語がのびてきている、そういうことなんですけど、それは確かであると。ブレンツィンガーもそう言うわけですね。私なんかいろいろな外国からEメールが来たりするし、自分が書いたりもしますが、だいたい英語で書くことが多いですね。そういう意味では英語は確かに世界的に広まってきたわけなんです。しかし、だからと言って、とこのブレンツィンガーは言うんですけども、英語が世界的に広まることによって、一つでも滅んだ言語はあるかと言うんです。彼はそんなものはないと言うんですね。英語のグローバル化によって消滅した言語というのは一つでもあるのか。ないのじゃないか。言語は英語によって世界中でいろんなところで消滅しているわけなんですけども、それは、彼が言うには、国家的レベルの中での消滅なんだと。

たとえばアメリカ合衆国で、アメリカインディアンの言語がいくつも滅びましたね。それからオーストラリアもそうだし、日本だってアイヌ語はもうほとんど話されなくなっている。そういうことは世界中で起こっているわけなんですけども、しかしそれは、たとえばアメリカでアメリカインディアンの言語が消滅しているというのは、英語がグローバル化したのとは関係ない。それは英語がアメリカ合衆国で国のすみずみまで話されることによって生じてきた、アメリカ合衆国の国内的な、国家としての枠組みの中で生じたことなんだと、彼は言うわけなんです。だから大部分の言語ってというのは国家的なレベルのなかで、危機に陥ってきたわけなんです。マイケル・クラウドは、そういうことが全世界で起こると言うふうに思った。

そのマイケル・クラウドというのはアメリカ、アラスカ大学のフェアバンクス校の教授をしていて、アメリカインディアン、特にエスキモーの言語の研究、それからアメリカインディアンの言語の研究をしている。そういうところはよく知っているわけなんです。そういうところで生じていることが世界的に生じるというふうに、彼は思ったのじゃないかと私は思いますけども、本当にそういうことが世界的に生じるのかということ、私なんかは疑問に思うんですね。そのマイケル・クラウドが言ったことはどういうことかという、要するに、以下のようなことです。表2をもう一度見ていただきたいのですが、そこに話し手の数ごとの言語数を書いてありますけども、上から三段目に、百万人までのトータルが示されていて、これが、さっきも言いましたが、世界中の言語数の5パーセントである、ということですね。これとまさに彼の言っていることが一致しているんですね。彼が何を言っているかって言うと、一つの言語が維持されるためには最低百万人の話し手が必要だと彼は論文の中で何回も書いてます。これが彼の根拠になっているんです。どうして彼がそういうふうに思ったかという、例を挙げています。たとえばフランスのブルトン語という言語、ブレイス語と最近言われたりしますが、ブルターニュ半島に話されている言語ですけども、ケルト系ですよ。その言語が、100年前には約百万人の話し手がいた、と言うんですよ。それが100年たったらもうほとんど話し手がいなくなっている、という例を彼は挙げています。そういう例から、一つの言語というのは話し手が百万人いても、100年経てばなくなるんだ、ということを使う。そして、それを敷衍しているとか広げるんです。そういうわけで、マイケル・クラウドにとっては百万人、100年というのがどうもキーワードになっている。そういう角度から表2を見ると、百万人以上の話し手のある言語は、世界の5パーセントしかないわけですよ。これにまさに一致しているわけで、結局マイケル・クラウドが言っていることは、世界中の言語で百万人以上の話し手のある言語は5パーセントである、ということに過ぎないんですね。下手をすると世界の言語の、本当は95パーセントと彼は言いたいんだと思いますけども、ちょっと日和って、90パーセントから95パーセントの言語が21世紀中になくなるかもしれないと言っています。しかし、これは結局のところ、百万人以上の話

し手のある言語は世界にたった 5 パーセントしかない、と言っているに過ぎないわけです。

5.2 アフリカの部族語は危機言語か

その辺がね、私なんかがアフリカで調査していて本当にそうかな、と思うわけです。いつも私は数万人の話し手のいる言語しか調査していないので、じゃあ私の調査している言語は全部消えるのかなというふうに思うんですよね。百万人もいませんから。アフリカでも百万人以上話し手のある言語はもちろんたくさんあるわけですけど、しかし圧倒的の大部分はそうではない。もっと小さな言語が話されているんです。そういうことはアフリカなんかを調査している人だったら恐らくみんな感覚的に持つてると思うんですけど、マイケル・クラウスという人は、アメリカとかオーストラリアの事情も多少は知ってるようですけども、そういう、大きなものに押されてしょぼしょぼしているものしか見ていないわけです。なので、ついついそういう悲観的な話になってくるのだと思います。このブレンツィンガーという人も、実はマイケル・クラウスを批判するわけですけども、彼も言語が危機に瀕するかどうかということについては、話し手の数というのがやっぱり重要だというふうに考えているみたいですね。このブレンツィンガーという人は言語学者です。言語学だけじゃありません、いろんなことをやっていますけど、特にアフリカのことに詳しくて、Language Death のような書物を編纂しているんですけども、彼でさえ、一つの言語が維持されるには話し手がやっぱり 30 万とか 40 万人必要なんだと書いている。そしたら、やっぱり私が調査しているような言語は全部滅びるんだと思ってしまうんですけど、本当にそうかな、というのが直感的な疑問なんです。

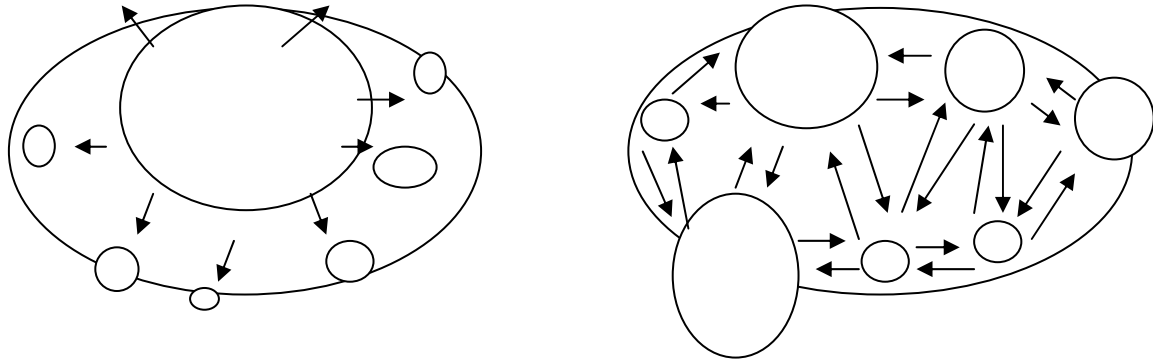
それで、私の経験なんですけど、図 1 に地図がありますけど、一番最初 1976 年に私はアフリカに調査に行ったんですけど、コンゴの真ん中あたりよりちょっと下にテンボ語というのがあります。これは誰も調査したことがないので、米山俊直先生に連れて行っていただいて、その先生は人類学の先生で、私は言語を調査するということでした。これは 4 万人から 5 万人ぐらいの人たちです。それでちゃんとした言語を話しているわけですけども、その隣にレガ族というのが住んでいて、これがものすごい大きい人たちで、数十万人はいます。私はテンボ族の西の方で調査していたので、レガ族の人たちともずいぶん付き合って、テンボの人とレガの人たちがどういう付き合いをしてたかもずっと見ていたんですけども、テンボの人たちは 4 万人か 5 万人ぐらいの人たちですけども、しかしレガ族の前へ行っても、ひるむところがないのです。おろおろすることは全然ないし、堂々としている。別に威張っているわけではありません。ごく普通に付き合っているのです。そのテンボの人たちにとってレガの人たちは自分たちより 10 倍ぐらい人数が多いということはもちろん知っているわけです。しかし、だからといって別に卑屈になることもなんともないんです。そういう付き合いなのです。大きいほうが偉いかというと必ずしもそうではなくて、この境目あたりでレガとテンボが混住しているような地域では、言語がお互いちょっと違うので、なかなかお互い話しても通じないですけど、スワヒリ語で話すことはもちろんありますけど、部族語で話すこともある。その時見ていたら、テンボの人たちがレガ語を話すのはほとんど見たことがありません。もし部族語を話すとしたらレガの人がテンボ語を話すのです。大きい方が偉いかというと、そうではない。どうしてそういうことになってるかということ、ちょっと言語構造の話にもなるんですけど、テンボ語っていうのは母音間で子音がずいぶん脱落しているのです。それに対して、レガ語は脱落していません。脱落している言語の人が、脱落していない言語を話そうとしたら子音を復元しないとイケないんですけど、それがもうできなくなってしまっている。しかしレガの人たちは、自分たちにある単語から子音を母音間で除けていけばいいわけですから、発音しやすい。まあしゃべりやすいわけです。しかしテンボの人たちはなかなかそれができないので、それも一つの理由ですけど、レガの人たちがテンボ語を話すようになっていく。そういうのを見ていると、ひとつの民族というか部族にとって、人間が多いとか少ないというのは、何か決定的なものになるかというのは、私はそんなことは全然ないと思っていたんですけど、アメリカとかオーストラリアで言語を研究している人たちは、どうもそういう、人間が多い少ないというのが非常に重要だと思っている。その辺がちょっと違和感があったということなんです。

富川盛道という先生がいらっしゃいまして…。あ、その前にもう一つ言わないと…。ブレンツィンガーは、危機言語に3つのレベルがあると言っていますが、彼はアフリカで起こっているのは、アメリカにおける英語のように、一つの言語が国のすみずみまで話されるようになって小さな言語が減びるといふんじゃなくて、むしろ、国内レベルと書いておきましたけど、一つの国の中で、局所的に、国全体から見ればむしろ小さな言語と言ってもいいと思いますが、それが、それよりももっと小さな言語を減ぼす、そういうのがむしろアフリカで起こっているんだ、と言うわけです。彼が挙げている例はタンザニアで、マサイ語を話す人たちが、アキエ語を減ぼすといった例です。ただアキエのことをよく調べたら、マサイ語の方言と言ってもいいような言語だと思うんですけど、それを吸収してしまうと。そのようなことがアフリカのあちこちで起こっている。それは国内局所的レベルであると言っている。そういうのがアフリカで実は起こっているんだと。それに対して、国家的なレベルで起こっているのは非常に稀です。アフリカでは強いて言えばタンザニアとボツワナですね。タンザニアでスワヒリ語が、そしてボツワナではツワナ語がのびてきている。そのぐらいしかないんだと言っています。

ですからブレンツィンガーは、世界的（グローバル）レベルでは危機言語は起こりえない、一番起こるのは国家的レベルで、アフリカでは危機言語はなかなか生じない。言語がなかなか危機にならないというのは、この国家的なレベルで言語がのびてくるということがほとんどないからだ、と言っているわけです。それで、アフリカでは国内レベル、国内局所的レベルで危機言語が起こっている。なので、アフリカでは危機言語ってのは少ないんだってことを言っているんですけども、だから結局ブレンツィンガーも、アフリカでたまたま起こってないというだけで、考え方としてはクラスとあんまり変わらないのです。でもしかし、本当にそうなのかというので、ちょっとその富川盛道先生のことをお話ししたいんです。この方は、私もそうですけど、栗本さんも、東京外大AA研というところに就職したときに、東京外国語大学AA研にいた社会人類学者ですね。もともとは医学の勉強していて、それから北大に行って、知里真志保の助手もしていたという人ですけど、アイヌの調査をずっとしていたんですけど、その後アフリカで調査された。タンザニアのサバンナに住んでいるダトーガという牧畜民ですね、そこの研究をずっとされていた人なんですけども、この人が弘文堂から『ダトーガ民俗誌』という本を出された。これは亡くなられてから弟子の日野さんという方がまとめられたんですけど、その中に収録されている論文があるんです。もちろん書かれたのはそれよりずっと前ですけども、アフリカの部族本位制ということが書かれている。その中にですね、富川先生の言い方だと、ちょっと引用しますと、「数百万の人口を持つ部族もわずか数万人の部族も、一般的には等価の集団として、対等に認知しあい、共存なしうることが許されてきた社会だ」と。アフリカってというのは、そういう社会だと彼は言ってるわけです。

では、どうしてそういうことが言えるかという、いくつかの例があるんですね。具体的な例はいくつかあるんですけど、富川先生が挙げている例の一つを紹介しますと、ダトーガ族から隣のイラク族にもあるらしいんですけど、ミティマーニと呼ばれる制度があって、これは配偶者に先立たれた人、自分の配偶者が亡くなった人は、男性でも女性でも、その社会で不浄な存在だと思われる。その不浄さを取り除くには、誰かとセックスをしないとイケないのだけれども、その社会には相手をする人間はいないというんですね。というのは、不浄な人間と関係を持つと、自分も不浄な存在になってしまうというわけで、関係を持つ人がいない。しかし文化が違えば、そういう文化を共有してない人たち、つまり違った部族の人たちは、関係を持てるわけですよ。なので、救われるわけです。もしそういうことがなければ、ダトーガの人たちは、最後には不浄な人間ばかりになってしまうわけですよ。救われないようになってしまうわけですけども、そういう違った部族の人間がいることによって、それが解消されている、というわけですね。それから、牧畜民に特徴的な年齢組とか年齢階梯制度というのがダトーガにもあるわけですけども、そういうのも実は自分たちだけのことでなくて、他の部族がどういう階梯制度を持っているかを意識して作られていくというふうには彼は言う。その具体的な例はそこに載っていませんでしたけど、彼が言いたいのは、これは私もそういうふうだと思うんですけども、アフリカというのはそういう違ったものがあることが重要な社会を作り上げている。自分と違うから駄目だというふうにはなかなか思わない。自分と違う

から価値があるんだというふうに思う社会を作り上げているわけですね。



A. ヨーロッパなどの国民国家

B. アフリカの国家

図5 国民国家の概念図

図5の「国民国家の概念図」をご覧ください。これは私が勝手にこんな風になっているのではないかということを書いてみた図なのですが、ヨーロッパなんかの国民国家は一つの、一番外側の枠が「国」というわけですけど、その中になんか大きい集団が一ついて、小さいのがいくつもいる場合、その大きなのが小さなものをグイグイ押しやっている、周辺化しているような状況ですね。右側のアフリカの国というのは、国はもちろん国家としてあるわけですけども、大きいのもあるし、小さいのもある。そして、それが一方から他方への一方的影響というのではなくて、大きいのも小さいのに影響を及ぼすけれども、小さいのも大きいのに影響を及ぼす、そういう関係で結ばれている。大きいのが小さいのをグイグイ押しして、押しっぱなしになっているというものではどうもない。こういうのが、私が持っているイメージなんです。

A、Bというふうにしておきましたが、Aみたいなタイプはアメリカ合衆国、フランスなんかもそうです。日本なんかも、恐らくこんなのだと思うんですね。オーストラリアなんかは典型的にこんなのですよね。アメリカなんか私はおもしろいと思うのですが、白人系の人がたくさんいて、それがまあ今のところは主流なのですが、あとヒスパニックとか黒人とかアジア系とかいろんな人がいるわけです。もちろんアメリカインディアンの人もたくさんいるわけですけど、そういう人たちはあんまり言わないけども、例えば黒人の人たちってというのは、自分たちが黒人に生まれたこと自体が罪であるかのような意識にさいなまれることがあるらしいんですよね。ですから、こういうAみたいなタイプの国家っていうのは、違う人たちの価値がわからない社会ですよ。小さな人たち、なぜ彼らが違うのかわからない。意味がわからなければ価値がない、存在価値がないとついつい思ってしまうわけです。なので、あんまりいい方向には行かない、というふうに私は思うんです。やっぱりそういう社会っていうのは、おそらく小さい人たちが、自分たちの価値が一体何であるのかわからないと主張しないとイケないと思うんです。これはちょっと余計なことですけども、そういうふう思うんです。

6. おわりに

だんだん最後の方に近づくわけですけども、私はこういう風に見ていて、アフリカの社会というのは、お互いが他を尊重しているような社会ですね。ですから、相手が大きいとか小さいとか、そういうことと関係なく、それぞれが普通に生

きていけるんですね。アフリカも戦争みたいなのはたくさんあるわけですが、特に栗本さんが研究しているようなところ、牧畜民が家畜の奪い合いをしたりしているところはありますし、また部族紛争みたいなこともある。もっともアフリカには2,000も部族・民族がいるということで、それを分母にして紛争数を割ったらヨーロッパなどより少ないかもしれませんが、あることはあるんです。いろいろなところにあることはあるのだけれども、それはむしろ例外的なのではないか。冷戦時代の米ソの代理戦争みたいなものもあったし、それから今でもゲリラっていうのはあちこちにいます。今私が行っているウガンダでも、スーダンとウガンダの間をうろちょろしているコニーという人がいて、これは反政府ゲリラということで必死に政府軍と戦っているのだけれど、今のウガンダ大統領のムセベニも実はゲリラだったわけですね。それが大統領になっている。そういう人たちは、アフリカのあちこちにいます。どうしてそんなゲリラがアフリカのあちこちにいますのか私も不思議だったのですが、これもだんだん余談ですけど、例えば私が調査している村にコミュニティセンターがあって、そこに時々人がビールなんか飲みに来るので、ちょっとしたバーみたいなものがある、そのバーのお兄ちゃんと話していたら、「俺も大統領になりたいんだ」って言うんですね【笑い】。ウガンダ人はみんな大統領になりたいと言うんです。それでね、「日本では大統領を選ぶのにみんなガンを使うか」と聞かれます。「日本は選挙というのがあるので多少お金を使うかもしれないけど、鉄砲の打ち合いはしない」って言ったんです。彼は「そうか」って言うんですけど、どうしてそういうふうになるかという、日本でお金を儲けたいと思ったら、たとえば会社を起すとか、社長になろうとか、そういうふうになるいろいろな思っただけですけども、アフリカの場合はそういう選択肢がありません。それで、よく聞いてみたら大統領ってのが一番実入りのいい職業だというふうには彼らは思っている【笑い】。だから、日本で社長になりたいと思っているぐらいの気持ちでみんな大統領になりたいって、そういうふうにはみんな言うわけですね。だから、人が人としての能力を発揮できるような場があれば、私はもう少しアフリカはいい方向に行くのではないかと思います。そういうアフリカ人の能力は一杯あるといろいろな例から思いますが、それを生かすシステムがなかなか構築されていないというのがアフリカの問題だと思います。しかし一般的に言って、アフリカ人は非常に陽気なんですね。非常に陽気で、おそらくアメリカ人の言語学者、あるいは民族学者がアメリカインディアンを見ている状況から得られる印象と、アフリカで調査している人間が持つ印象ってのは恐らく大きな違いがあると思います。ですから、結論としては、恐らく陽気なエネルギーが、アフリカの少数民族や少数言語を存続させている源ではないかというふうに思います。というのが今日の話です。以上です。

質疑応答

白岩広行(大阪大学大学院生)

聞いていて、最後のアフリカの国家はお互いの部族を尊重して認め合って、っていうふうな形でお話をまとめられたかと思うんですけども、こういったアフリカの国家というか、そういった像っていうのは今後たとえばヨーロッパ型とかに変化する兆しとか、これから変化するような兆しとか現在のところありますか。たとえば、お話の中でもタンザニアとかでは、国家的レベルで言語が危機にあたりしているっていうふうなお話があったかと思うんですけども、これからどうなるのかっていう予測といいますか、そういうものがありましたらお聞きしたいと思います。

梶 わかりませんが、いろんな形を変えてね、部族的なものが絡んでくるんです。例えばウガンダなんかでもね、北の方はナイロート系の系統の言語を話している人がたくさんいて、南の方はバンツ系を話す人がたくさんいるわけですね。そういう中で、スワヒリ語も実は共通語になっているんですよ。だけど、スワヒリ語は系統から言えばバンツ系の言語なので、バンツ系の人の方がたくさん話すかというとは実はそうではなくて、ナイロート系の人の方が実はスワヒリ

語をよく話すんですね。アミンという大統領がいましたが、彼は北の方の出身ですよ。それからオボテ大統領も北の方。そういう人たちっていうのは、カンパラっていうのが首都ですけど、そのあたりに住んでいるガンダ族という大きな部族の人たちがいるんですけど、その言語のガンダ語っていうのが嫌いなんです。ものすごく嫌いなので、スワヒリ語を推進するわけですね。

だから、何語を共通語にするかというのでもね、そういう気持ちが作用してくると思います。例えばコンゴでもそうです。カサブ大統領というのがいて、キンシャサというのが首都ですけど、キンシャサというのはコンゴ族の周辺地域で、カサブはコンゴ族です。コンゴ族の周辺地域だからコンゴ語でやってもいいのですが、コンゴ川という大きな川があって、その上流・中流の方からどんどん人が川に沿ってキンシャサに入ってくる。ですから、1930年代からリンガラ語が実は首都キンシャサの共通語だったんです。しかし、彼はリンガラ語が嫌いなんです。しかしコンゴ語はリンガラ語に押されて、共通語というか、国全体の唯一の「国語」みたいなものになる望みはない。なので、フランス語にしようと言うんですね。形を変えてそういったライバル心はずっと残ってきています。例えばウガンダでも、じゃあスワヒリ語を国語にしようかという話になったら、みんなアミンのこととかオボテのことを思い出してしまって嫌なんですよ。なので、未だに英語が重要な役割を果たしているわけですね。

なので、言語の面でヨーロッパ型みたいになるというんだったら、例えばフランスがどこへ行っても今はフランス語が話されているという状況ですけど、そういうふうになるかという、なかなかそういう唯一の国語というのはできてこないだと思います。コンゴでも4つ大きな国語があると言いましたが、4つがそれぞれの地域的一种ライバル意識があって、決まらない。決めることができないんです。なので、ついついフランス語が国全体の共通語として機能している。質問の意味は、唯一の国語はできるかということかと思うのですが、言語の面に関しては、なかなかそれはできないんじゃないかと思います。

白岩 今後も考えにくいという？

梶 ただしかし、それが駄目かという、必ずしも駄目とは思いません。私なんか、日本人もみんなそうだと思うんですけど、同じ日本語を話しても、いろんなレベルがありますよね。田舎に帰って話す言葉はちょっと違うし、家庭内で話す言葉もちょっと違うし、こういう場で話す時もちょっと違う。いろんな状況に応じてスタイルを使い分けているんですけど、それは一応一つの言語の内部での幅ということでわれわれは処理しているんですけど、それがアフリカの場合は違う言語が入ってきているということだけなんです。人間というのは2つ言語を話したら駄目なのか、いま日本で小学生から英語を話すのは良いか悪いか、勉強するのは良いか悪いかっていう議論がありますけれど、そういう問題にもちょっと絡んでくるんですけど、英語を勉強したら日本語がおろそかになるのかっていうことですよ。しかし、例えばベルギー人なんかで見たら、ベルギー人でなくてもいいんですけど、本当のバイリンガルの人たちってのはたくさんいますからね。そういう人たちは、言葉ってのは考えないんです。言葉っていうのは意識すると話せないんで、話せるというのはもう無意識的なことです。その無意識のレベルで一つの言語だけのほうがいいのか、二つあったらダメなのかっていうのは、普通言われているのは一つでも二つでも関係ない、二つやったとしてもね、うまくいくんだというふうに言われてますけれど、アフリカ人は非常にポリグロットですね、そういう意味では。しかも、われわれは外国語を勉強するというとついつい辞書とか文法書があって、教える先生がいないとできませんけど、アフリカ人はそんな辞書も文法書も何にもなしで覚えてしまうんですね。ですから、それはやっぱり人間の知的レベルの幅だと思うんで、たとえ言語が、ダイグロシアとか、いろいろな社会的な機能が違うときに違う言語が入ってくるというのは、私はそれほど負担にはならないんじゃないかと思います。

ただ教育の時は、何語で教育を受けるかっていうのは確かに問題です。私もタンザニアで調査をしている時に中学校に

行ったのですけれど、ちょっと授業を見せてもらった時、たまたま理科の時間で人体のいろんな部分を解剖学的に教えていたのですが、難しいんですよね。英語でも、人間の解剖学的な用語って、ついついギリシャ語起源の単語がたくさんありますから、「食道」でも *esophagus* とか言うわけですね。日本語の「食道」みたいな言い方じゃないんですよね、難しいギリシャ起源の単語を使っている。そんなのを人体の機能を勉強する時にタンザニアの中学生は覚えられないのかなと、ちょっと疑問を感じました。何語で授業を受けるかということは非常に重要ですけども、しかし、言語がたくさんあるということ自体はそんなに悪いことじゃないし、よくもないかもしれませんが、悪いことでも何でもなし。統一されることがいいとは思わないし、できればそれでも構わないんですけど、なかなかできないのじゃないかと思います。

白岩 ありがとうございます。私もどちらがいいとかそういうつもりではなかったんですけど、今後もそういう形になるのかなと思います。

栗本英世（大阪大学大学院人間科学研究科）

ふたつコメントがあります。

まず、このクラウドの説は確かに狼少年的なセンセーショナルリズムで、これが正しくないというのには私も全く同感です。ただ、表2によると、話者が百人以下の言語が548あって、千人以下だと1,619ですね。ある言語が存続していくためには、ある程度以上の話者数が必要だと思います。もちろん百万人もいらなと思いますけれども、だけでもやっぱり百人以下だと、遅かれ早かれ消滅するんじゃないでしょうか。ですから、数百から千ぐらいの言語は、これから数十年ぐらいの間になくなる確率が高いことは否定できないのではないかと思います。そのうちのいくつぐらいがアフリカの言語かよくわかりませんが、数割ぐらいはアフリカの言語だろうなと思います。

ふたつ目のコメントは結論部分に関わることですが、富川さんや梶さんが主張されているようなことは、アフリカ研究者はもっともっと声を大にして主張すべきだと思います。つまり、多文化主義とか多文化共生とかという言葉が生まれるずっと前から、アフリカの人たちはそれを実践してきたというわけですね。で、言語と文化と民族を混同して話しますけど、多言語・多文化・多民族の共存ということが、アフリカの人たちの生活の中で実践されてきたということは疑いのないことだと思います。しかし、私のコメントは、梶さんの結論はかなり楽観主義的すぎるということですね。私はもうちょっと悲観的な、悲観主義的な見方をとっています。人口が関係ない、人口一万人の集団も百万人も対等に付き合っている、これはある面では事実なんです。つまり日常的な生活のレベルでは、その二つの集団が接触して交わっている、インターフェースには、別に一万人の集団と百万人の集団が全体として対峙してるわけではなくて、個人同士で付き合うわけですね。だからそこにおいては、もちろん数は関係ないと思います。だけど、現在の国家における別のレベルでは、民族の人口が重要になる局面があるわけですね。これは民主化という文脈です。民主化は過去十数年の間に起こっていることで、それは経済の自由化とセットになっているものですから、グローバル化の一つの帰結とも言えます。つまり、民主主義というのは数の政治ですから、国家レベルでも地方レベルでも、数が多いほうがその政治的代表性は高くなります。政府の中でポストが振り当てられたり、議会、中央レベルでも地方レベルでも議会でたくさんの議席を持つことができるんです。ですから、民主化の結果、人々がものすごく自分たちの人口を気にしだしたということです。そのレベルにおいては人間の数が多いか少ないかが、大きな新しい意味をもつようになることがあると思うんですね。

それからこれは、どれだけ一般的かという問題はあるんですが、お互いの違いを認めて一緒に生きていくんじゃなくて、他者を否定する、さらには他者を抹殺するということがあちこちで起こっているわけですね。図1の地図の地域の中では、もちろんルワンダで起こったジェノサイドといわれる虐殺が一番よく知られてます。梶さんが最初にフィールドワークを行なわれた旧ザイール、現在のコンゴ民主共和国の東部、フンデとかテンボの人たちが住んでいるところから北の方に広がる地域でも、過去十年ちょっとの間に凄惨というか悲惨な殺し合いが、要するに言語や文化が異なる人たちの間の殺し

合いが行われています。なぜそういうことが起こるのかというのはまた別の問題ですが、梶さんの今日の結論ではそういう相手との違いを否定していくような側面が、あまりにも楽観主義的な見方の影に隠れているんじゃないかというのがふたつ目のコメントです。

梶 コメントですから、私もあえてコメントしませんが、そうかもしれません。

栗本 (笑い) もちろん、物事には両方の面があります。あまりにも世の中では悲惨な面ばかり強調されるから、楽観主義的な面を声を上げて強調しないといけないというのは、正しいと思うんですけど…。

梶 ありがとうございます。まあそれは確かにそうですね。けども、私もよくわかんないんですけどフツの人たちとね、ツチの人たちが、私も友達たくさんいるんですよ。ルワンダも行ったし、コンゴの地域は昔はフツに追われてツチの人たちがずっと逃げてきていたので友達もたくさんいるんですけど、どうしてああいうふうなことになったのか、本当の理由は私もよくわからない。しかし今一つ思い出しましたけれど、ルワンダ語をずっと研究してきたベルギーのクープさんという人がそれについてちょっとコメントしていたのを思い出しました。人間にはなんかこう、アフリカ人には、と彼は言わなかったと思いますけれど、なんか加虐性と言ったか残虐性と言ったのか正確な用語は思い出せませんが、その部分があるんだと彼は言っていましたけどね。

古川優貴(一橋大学)

私は2003年から2006年までの間の約2年間、ケニアの初等の聾学校でフィールドワークをしていまして、今のお話にすごく関連しているんですけども、私がいたときは、聾学校はどこにあるかというケニアの西の方で、カレンジン系のナンディ人なんかがたくさんいるところにありました。その聾学校の中でよく冗談です、例えばナンディ人同士とか、ナンディ人の子たちが集って話しているときに、「ルヒャ人はこうこうして食事をする」みたいな感じでおもしろおかしく話しているみたい、あと「キクユ人はどうこう」っていう感じで、それもおもしろく話していて、それは別に聞こえない聾学校の子たちもそうですけど、聞こえる周りの大人たちも結構そういう冗談で自分と違うグループの人たちの話をしていた。

ところが、その後ケニアに行っていないのでわかりませんが、今の状況なんですけど、昨年末に大統領選がありまして、それをきっかけにもすごい人が死んでしまって、むこうの人とようやく連絡取れたかと思ったら、「今住民が難民を殺している」とかそういう話をしていて。そういう大統領選の話もいろんな報道を見るとすぐ部族対立っていうふうになっちゃうんですけど、どうもそうじゃないらしい。けど表面化してくるのは部族同士の対立とかあるいは貧富の差とかそういう方がむしろ大きいかもしれないんですけど、そういうのが何かをきっかけにしてワッと、それがもともとあって表面化するというよりも何かをきっかけにして「違う」っていうことがいきなりコンフリクトになっていくっていう状況はほんと、梶先生が今おっしゃったんですけど、私もどのように解釈していいかわからないところがあるな、というのは栗本先生のお話の具体的な例としてコメントさせていただきました。

梶 一見部族的な違いに見えるようだけでもそうでないっていうのは、私はいくつか経験した例があるんですね。私、最初、テンボ族を調査していて、インフォーマントの若い男性がいて、何年かしてるうちに結婚することになったんですよ。アフリカって婚資がいるでしょ。結構いって、私の調査費からほとんど出したんですけど、その結婚する相手の女性というのが、自分の部族でなくて隣の部族の人だったんですね。彼はそちらの方が婚資が安いというのが大きな魅力だったんですけど、その時にね、彼の兄貴の嫁さんとかね、広い意味で家族ですけど、そういう人たちはみんな反対するんです。

「あその部族のやつは全然働かない」とか「けちだ」とか「腰が軽い」とかいっぱいそういうことを言うんです。私もそうかなというふうに思っていたのですが、よくよく聞いてみるとね、どうもおじさんとかおばさんとか兄弟とかは、やっぱり彼のために婚資を出さざるを得ないんですよ。それを出したくなかったんです、本当は。本当は出したくなかったので、「あそのやつは本当にダメなやつだ」とか「腰が軽い」とか「ケチだ」とかそんなことばかり言っているんです。なので、何が原因なのか、本当に思っていることは人はなかなか言いませんから、見かけはそういう部族的なものがあるかのように本当は違うというのはいくつも経験としてありました。

平塚雄亮(大阪大学大学院)

一番最初の白岩さんの質問にちょっと関連することで、私も図5のBのアフリカの国家のこの部族同士が対等に認め合っていて共生しているというかたちに関してなんですけども、たぶんそれは部族間の意識の問題だと思うんですけど、それが実際の言語の使用というか、言語行動として反映されている実態というか、そういう現実はあるんでしょうか。特にたぶん接触、部族の接触する場面での言語使用において意識が反映されているというのはあるんでしょうか。

梶 それは例えば借用語とかそういう意味ですか？ こういうふうにはね、平面的に書くとよくわかりませんが、言語ってのはよく似ている場合とまったく違う場合がありますよね。系統が違う場合はもうぜんぜん違うし、同じ系統のものであったら似ていますよね。アンコーレ語とキガ語、トーロ語とニョロ語はよく似ているわけですよ。言語の近い、遠いということ、例えば借用とかがなにか関係あるのかと言えば、それはあんまり関係ないような気がしますね。人間話す時は何語でも話すので、近い言語だから話しやすいということは表面的にはあるとは思いますが、どうしてもその言語が必要な状況になってくると、人間てのはどんなに言語が自分の母語と違っていても話しますからね。典型的なのは、私が見たのは、セネガルの、西アフリカですけど、セネガルの南部のほうですね。ちょっとガンビアという国が割り込んでくるので歪な構造になっていますけど、ガンビアという国の南側、ここもセネガルなんですけど、カザマンス地方というところですけど、そこで見たのは一人の人間が7つ8つの言語を話すという、しかも一つ一つの言語がもう全然違うんです。日本語と朝鮮語とアイヌ語と中国語ぐらいの関係なのですが、そういうのを7つも8つも話すんです。しかもそれらはほとんど完璧。一つ一つの言語は、それプラスフランス語ですよ。ですから、言語ってというのは、関係が近いから仲が良いかっていうとそんなこと全然ないし、中南米なんか、チリとアルゼンチンとか言語は同じだけれど仲が良いかというところも、ボリビアとかね。エクアドルも仲が悪かったり。言語が同じだから仲が良い、違うから仲が悪いかというところも全然ないし、また大きいやつと例えば小さいやつがいたときに、どちらがどちらに影響を及ぼすかっていうのは私も十分なデータを持ってわけじゃありませんけども、レガ語とテンボ語を見ている限りは、どちらからどちらにより影響が大きいかっていうのはわかりません。ほとんど同じじゃないかと思えます。

ただ民族によって、例えば木があったらついつい切りたくくなるような人々もいますよね。ものすごい活動が活発で、商業活動も活発で、ついつい荒地があったら開墾してしまいたい、木があれば切って畑にしまいたいって人たちがいることは事実です。そういうのはしかし、言語は似ていても、そういうふうになるタイプとならないタイプがあるので、これも言語とそういう生業ってのは、あと気持ちとかね、必ずしも一致しないなと思っています。ただ、そういう活動的なやつはとにかくどんどんどんどん出て行くし、自然と一緒にひっそり暮らすようなタイプの人たちもいるわけですよ。けれど、しかし言語的に見たら、どちらがより優勢でというのは私はあまり気づかなかったですね。

栗本 今あった梶さんのお答えの補足ですけど、Greenbergの有名なアフリカ言語の系統分類と分布を見ると、アフリカ大陸の真ん中、中部アフリカから南部アフリカまで、のっぺりと一様に、バンツー諸語におおわれています。だけど、東アフリカからエチオピア、スーダンにかけては、モザイク状になってますよね。三つの語族の諸言語がモザイク状に混ざ

り合ってるところです。この地域でも言語の大きい小さい、話者の多い少ないで、関係が一方的になってる例は、やっぱり基本的にはないですね、梶さんの言うように、関係は双方向的です。ただし、そこに政治的なファクターが絡んでくると、話は別です。このへんは北からアラビア語がずっと浸透してきてます。権力を背後に持ったアラビア語の、あるいはエチオピアだったらアムハラ語の話者が他のところに入っていくと、地元のマイナーな言語を普通は覚えようとしません。だけど権力を背後に持っていないで、普通の生活者として移動していくと関係が一方的じゃなくて双方向的になる。お互いに、相手の言語を学んだり、話したり、語彙を借用したりするのは確かだと思います。

梶 確かに。確かに大きな言語を話している人たちはあまり他の言語を話さないっていう傾向がありますよね。それが共通語になっている場合は特にそうですね。セネガルなんかはウォロフ族っていうのは 38 パーセントぐらいです、国民の。しかし国民の 80 パーセントがウォロフ語を話すんで、ウォロフ族の人間はどこに行ってもウォロフ語をしゃべるんです。もう学ぼうとしないんですよ。聞くだけなら国民のほぼ 100 パーセントが理解できるんで、まったくモノリンガルな世界ですね。でも同じセネガルでも、南部に行けば小さい連中がいっぱいいるんですよ。そういう人たちは非常にマルチリンガルですよ。極端です。大きな、ハウサなんかでもそうですね。どこ行っても通じるっていうふうになったら、ハウサの人たちはそれ以外話そうとしない。けれど小さいやつは、やっぱりたくさん話す傾向がある。

工藤真由美 (大阪大学)

日本の沖縄の状況を考えても、宮古の人は宮古方言が話せて、沖縄本島の言葉も話せなきゃいけないけれど、那覇で生まれた人が宮古方言を分からなきゃいけない必然性はないですよ。少ない話者数のところはポリグロットになりやすいというのは一般的傾向なのではないか、しかし逆はあまりないのではないかと、思います。きれいに双方向的になるというのは、1つのプロトタイプとしてはありうるのかなという気はしますけれど。例えば、今度ボリビアの沖縄系の移民社会へ行って来たのですが、みなさん、私たち沖縄語を話します、とおっしゃるんです。しかしよくよく聞いてみると、北部の人は、ヤンバル方言を話して、さらに沖縄の人たちの共通語である中南部方言が話せます。それから、移民の時に、日本語教育を受けてきて日本語も話せます。しかし本土の日本語を話すとは浮いてしまうので、ウチナーヤマトゥグチも話さなきゃいけないと。つまり外から来た我々に対しては本土の日本語を話そうとするけれど、内輪で話したいときには、本土日本語と沖縄方言が混交したウチナーヤマトゥグチを使う。もちろん、スペイン語も話さなきゃいけないのですが、そのスペイン語には、現地の人たちが話しているスペイン語もあれば学校で習うスタンダードなスペイン語もある。

あと、先ほどから質問が集中しているこの図5なのですが、2つの図が並べてあります。この「ヨーロッパなどの国民国家」という時には、書き言葉を入れざるをえないですよ。要するに国民国家を作るときには、言文一致で、話し言葉も重要ですが、なによりも国民が書き言葉でコミュニケーションできるようになるというのが非常に重要になります。で、ここのアフリカの国家というところで書いてあるのは、話し言葉の世界です。書き言葉と話し言葉の両方を考えなきゃいけない時の国家と言語との関係と、読み書きを考えなくてもいいときの国家と言語との関係は、同列に並べていいのかということがあるのかなと思ったのですが。

梶 はい。アフリカでイメージしているのは、言語の層が3つぐらいあるというふうに言いましたけど、その一番下の部族語のレベルだけの話だったので、書き言葉、共通語も入れると変わってくると思います。ただ、その場合も、やっぱり層をわけて書く必要があると思います。ヨーロッパの場合は層をわけなくても一面的に書けるような気がするんで、アフリカの場合は文字となってくると、みんな部族語を話していても、書くときはみんなフランス語で書くとか、あるいはスワヒリ語で書くとか、そういう公用語とか共通語で書く、英語とかフランス語で書くということになってしまうんで、部族語で書くということは原則ないんです。

工藤 そうすると、そのあたりのことを組み込んで考えた方がいいように思います。アフリカの場合、英語とかフランス語という書き言葉の世界では、部族語はひれ伏してしまわざるを得ないけれど、しかし一方、書き言葉という権力と結びつきやすいものと切れているがゆえに、部族語が保てるのではないか。また、先ほどの話を伺うと、スワヒリ語とフランス語とどちらを選択するかというところで上層語が1つに決まらないということも、ある意味、部族語を守っているのかもしれないと思われました。フランス語ならフランス語と1つに決めてしまうことが可能なら違ってくると思いますが、上層語の部分がコンフリクトを起こしているがゆえに、下の層の部族語が守られているというようなこともありえるのかなという印象です。

梶 アフリカの部族語は原則文字に書かないんです。じゃアフリカ人が文字書けないかってそんなことは全然ないんで、みんな英語で書いたりフランス語で書いたりするわけです。そういうのを入れると、一面っていうか平面的にはなかなか書けないですね。やっぱり層を設けて書かないといけないんで、ちょっと確かにこれはそういう意味では誤解を与えるっていうかよくないですね。ちょっと私のイメージを出してみただけなんで {笑い}。

渋谷 どうもありがとうございます。もうお約束の17時30分が過ぎてしまいましたので、ここでのお話はここまでとさせていただきます。梶先生どうもありがとうございました。